

VANITY FAIR 〈虚栄の市〉を馬車が行く

—Thackeray が描く snobbery の一側面—

齋藤 和夫

本稿に引用する William Makepeace Thackeray (1811-63) の小説 *VANITY FAIR* (1847-48) の原文は、The Oxford Library of the World Great Books の一冊から採った。(原文 P. ~) は全てこの版に拠る。また、日本語訳は、岩波文庫 三宅幾三郎訳 全6冊に概ね拠っているが、旧仮名遣いや旧表記法は現在のものに改めた。その他若干部分で私なりの考えで訳した場合もある。(岩波-3-P. ~) の表記によって、岩波文庫の第3分冊の~ページを示している。

作品の中で、Amelia の兄 Jos (eph) Sedley が登場するが、東インド会社の Boggley Wollah 地区の徴税官という実入りの多い地位にあって、多額の収入を得ていた。たまたま肝臓を害したために一時ロンドンに帰国していて、Becky が Amelia に伴われて Sedley 家に滞在した時に出会い、結婚しそうな状況になったが、Thames 川南岸地区の Vauxhall 遊園地に皆で出掛けた折りに Jos が酩酊の末に乱痴気騒ぎを起し、そのどさくさで沙汰やみとなった。彼は、美食ばかりして、太りに太って膨れ上がったような男である。Thackeray 自身、インドで財産をなした父が亡くなり、ロンドンに送られて親戚に養われたが、母が再婚した義父とも折り合いが良く、Charterhouse から Cambridge に入学した。成人となって父の多額の遺産を相続し、大学を中退して画家となるべくロンドンやパリで修行した。しかし、性来の美食と贅沢かつ放漫な生活のためせっかくの遺産をすっかり蕩尽してしまった。また妻が精神病となり、別居して療養させ、娘二人を親戚に預けて一人住まいを暫く続けた。生活の安定した後に子供達を引き取ったが、男やもめの寂寥感がこの作品の中でちらりと語られている箇所がある。彼の肖像画も挿絵の Jos に似てかなりの肥満体で、二

人ともインド帰りで大金持、ロンドンの slang でインド帰りのお大尽を nabob と呼ぶが、二人とも nabob 或いはその子と言える点では類似性がある。従ってこの作品に書かれている内容は Thackeray には他人事ではないのである。小説の結語で「Ah ! Vanitus Vanitatum !」「ああ空の空なるかな、すべて空なり。」で始まる虚無的な感慨を洩らしているが、これは、単に旧約聖書の「伝道の書」を引用したのではなく、作者自身の心底からの感慨だと感じられるのである。

この感慨は、吉井勇の短歌

「にぎやかに 都踊りの 幕おりし
のちの寂しさ 誰に語らむ」

に通ずるものがありそうである。[虚栄の市] の Fair はまさにお祭りなのである。吉井勇自身京都の花街で遊蕩の限りを尽くした華族歌人で、昭和8年妻の不倫から端を発して上流階級が世間の指弾にあい、すべてを失って高知県の山村に隠棲したことがあった。再び京都にもどったのは5年後であったが、生活は一変して悟り切った心境の歌が多くなる。最晩年の歌は諦念の気持ちを伝えている。

「京に老ゆ 昔の華奢^{かしや}を おもえども
人も変わりて せんすべもなし」

Thackeray は、1843年31才で、創刊2年目の *the Punch* の主要執筆陣に加わり、文才と時には画才を発揮した。そして1847年から翌年にかけて、*Vanity Fair* を、当時 Charles Dickens も行っていた月刊小説の形で20回に亘り、*the Punch* の出版社 Bradbury & Evans 社から発表し、一躍文名を高めた。この小説の挿絵も自分で描いたばかりでなく、小説全体が、ナポレオン戦争末期から1830年代に至る英国社会の動きを、パノラマのように推移する視覚性を備えている、と好評だった。次の章でこの小説を読む視点となる幾つかの Key Words を提示したい。差し当たりはパノラマもその一つに数えられよう。

注：panorama は、Edinburgh の画家 R. Barker が発明し、1788年にパテントを取って、ロンドンで興行を始め、19世紀の初頭には、大陸そしてア

メリカまで流行した。1870-71年の普佛戦争の時に流行したのを最後に、写真や映画に人気に移り、消滅した。従って Thackeray が小説を書いていた時代は、パノラマの全盛の時代だったのである。

第1章 KEY WORDS で読む *Vanity Fair*

1. PANORAMA

Vanity Fair のパノラマ性については、鈴木幸子『サッカレーを読む一統・不安なヴィクトリアン』(篠崎書林 1996年)に詳説されているので、それに譲りたい。確かに Vauxhall 遊園地の描写や、George と Amelia がロンドンで結婚し、Brighton に新婚旅行に行き、Jos や Dobbin と交遊している情景から、ナポレオンを迎え撃つ陸軍の動員令が出てロンドンに4頭立ての馬車で帰京し、次いで Chatham に軍が終結し、海を渡ってベルギーの Brussels に移動してベルギー、ドイツなどの軍と合流し、Waterloo に出動するあたりの情景の移り変わりは panoramic であるし、鈴木女史の所説も首肯できる点がある。少なくとも、*Vanity Fair* が高い視覚性を持つ作品であることは否定できない。

その実例として、「はしがき」に当たる冒頭の Before the Curtain で、彼は次のように述べている。(岩波-1-9)

「この芝居の興行人は、舞台の幕の前に座って、[市]の中を覗きこんで、そこのがやがやした有様を眺めていると、ひどくうら悲しい気がして来ます。食ったり飲んだり、恋を囁やいたり、それを振ったり、笑ったり泣いたり、煙草を吹かしたり、人を騙したり、喧嘩をしたり、踊ったり、ヴァイオリンを弾いたり、いやもう大変です。威張り屋が人を押しつけて練り歩くやら、洒落男が女に秋波を送るやら、悪者が拘りを働くやら、警官が見張るやら、ペテン師が掛け小屋の前でわめき立てているやら、(他にもペテン師がいるが、犬にでも食われろ)、それから金ピカに飾り立てた踊り子や老いの

頬を赤く塗った哀れな蜻蛉返りの軽業師などを、ポカンと田舎者が眺めている。その隙に掬りがそのポケットに手を突っ込む、というような有様。」(原文省略)

以上の文は、長々と言葉を連ねているようでいて、絵に描けばたった一枚の群衆風俗画なのである。

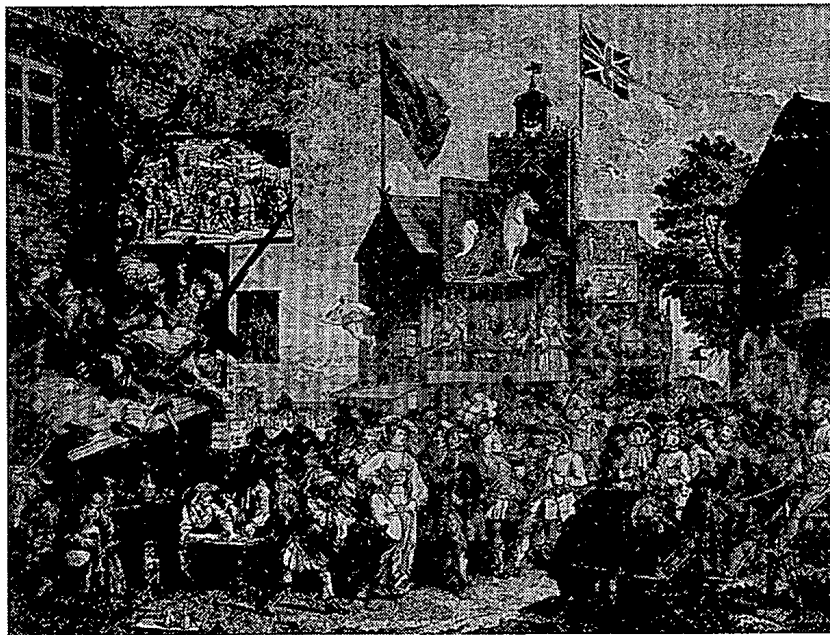
2. HOGARTH

文章と視覚芸術との関係の点で、上記によく似ている例を挙げると、由良君美（この方は東大の異色ある英文学教授だったが、惜しくも物故された）の『ディアロゴス演技』（青土社 1988）の「蛇線上のカーニバル」の章で、William Hogarth (1697-1764) の「サザック定期市」(図1) を以下のように解説した文章がある。

「耳を聳するばかりの騒音と夥しい人出。てんでんばらばらな活力の発揮は、中央の焦点を構成する美女のトラマーと、その上の構図上の中心点に見栄を切って静止するアレルキーノとによって巧みに押さえられ、纏め上げられ、これを軸にして、喧騒と無秩序とが放射状に展開する。騒音と混乱のポイントは左上方にあり、[バジャゼットの陥落]なる劇を熱演中のシバー・ブロッカー一座の仮舞台が、一瞬にして倒壊する。轟音とともに屋根もろとも落下。……ターバンがふっ飛んで這いつくばった大帝の上に、女王は真逆様にスカートを広げて転落。怪しからんことに、必死に柱にしがみつきながら、鬢の男の視線は、彼女の絶景をしっかりと見ている。頭上の椿事も知らぬげに、下ではミリタリー・ルックの犬を直立させたバッグパイプの男が熱心に吹いており、イカサマ博打の女はごまかしを見抜かれて、子供の客に俄鳴り立てている。その前をアビシニア少年がラッパを吹いて通り、右手前では、佝僂の助手を相手に手回しオルガンを男が座り込んで鳴らしている。中央から右手前にかけて、性・犯罪・盗み・喧嘩の花盛りである。美人ドラマーに見

とれてついて歩く二人の田舎者の馬鹿面、一人は崇拜のあまり帽子を脱いでいる。田舎男のすぐ脇では、途方も無くめかしこんだ伊達男が、借金のためだろうか、二人の執達吏に捕らえられ、その後ろでは、舞台上上がった薬屋が、口から煙りを吹くアトラクションとともに、インチキ薬の売り付けに狂奔しており、鞭を片手に女の腕をしっかりと掴んだ男の背後から、掏りの手が伸びて、ポケットの中身が抜かれ、女にキスを迫る男の背後には、馬上に長剣を構えた傷だらけの決闘士が形相凄まじく相手を物色中。地上の掏りに呼応して、右上の張り出し舞台でも、縫いぐるみの馬が、アレルキーノのハンカチを盗んでいる。そして空中では綱渡り。……」（まだあるがこの辺で止める）

図1 ホガース「サザック定期市」



Thackeray は画家志望であり、Hogarth の作品に接したことがある筈である。そうでなくとも、『虚栄の市』と「サザック定期市」とが良く似た発想に基づいているように思えてならない。Hogarth のもう一つの作品「Marriage à la Mode」を含め、Thackeray は絵画で表現された Hogarth の世界を小説化した感を与える。

3. PUPPET SHOW

だが、高い所からの鳥かん図は、細部、特に人の心の動きまでは写し切れない。この小説の主要人物 Rebecca (Becky) Sharp, Amelia Sedley, William Dobbin については、特にこのことが言える。

Thackeray は非常に用意周到な作家である。20回に亘って分冊で売るので、内容に前後の矛盾があれば、致命的な不評を招く可能性がある。読者の納得ゆく心配りが必要である。こうして彼は *Before the Curtain* の末尾で、この小説を puppet show (人形芝居) を楽しむように読むことを示唆する口上を述べる。

「興行人は、持って参りました人形が、全国の御目の高い方々の満足を買いましたことを思って密かに自負しております。名代のベッキ人形は、節々も殊のほかしなやかで、針金で踊る具合も生き生きとしているとの評判。アミーリア人形となると、少しはご蟲眞の数も減りますが、でもその彫りと言ひ衣装と言ひ、職人ができるだけ念を入れたものです。ドビン人形は、見たところいかにも無骨にできていますが、大変面白くかつ自然に踊ります。」(原文省略)

この小説の結語 (前に引用した *Vanitus Vanitatum !* の続き) にも puppet が現れる。

「さあ皆さん、箱舞台と人形を仕舞いましょう。人形芝居はお終いです。」

Come children, let us shut up the box and the puppets, for our play is played out. (原文 P.678)

4. PUNCH AND JUDY

さて、puppet show と言えば、英国人ならば直ぐ脳裏に浮かぶのが、永い歴史を持ち、現在も大衆娯楽の雄である、[Punch-and-Judy]

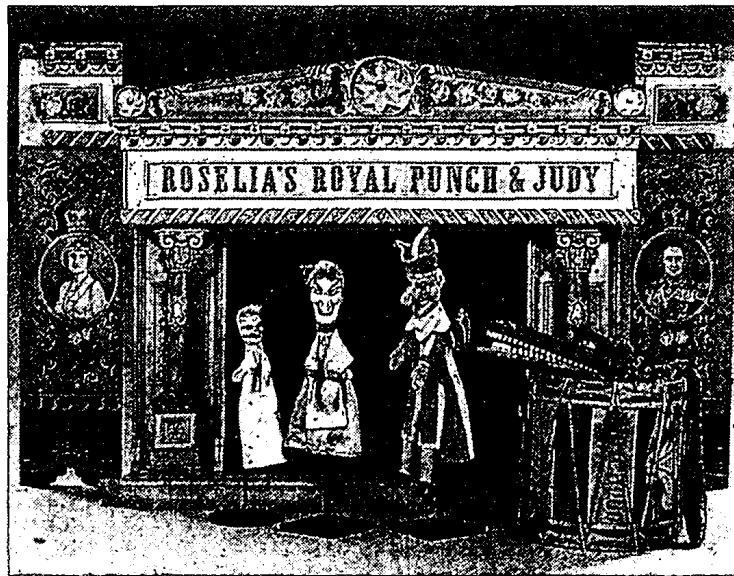
である。なにしろ、この puppet show が英国の文献に現れた最初が、かの Samuel Pepys の日記で1662年のことであり、現在もこの人形芝居で暮らしている puppeteers が100人近くいて、毎年その技能の競技会が行われているのだから、その息の長さは日本の大相撲にも匹敵するであろう。現在でも盛り場や海水浴場で見ることができるが、土、日曜日に、Covent Garden で演じられている。残念ながら私はまだ見る機会に恵まれていないが。日本では図2のように、伊東市プッペンハウス・ヨシノに人形も装置も所蔵されている。

さて、この puppet show の主人公である Punch は極めて indomitable (不屈な) picaro (悪漢) で、赤ん坊の娘を殺し、妻を殺し、死刑執行人を殺し、当たるを幸いにやっつけ回り、悪魔にすら負けない不死身な道化師である。そして Thackeray が主要な執筆者であった風刺漫画雑誌 *the Punch* はこの名を採ったものであるが、結果的にはまことに適切な命名であった。この世の力ある立場の者を、暴力で、或いは巧みなペテンで、次々と打ち倒してゆく Punch は、ペンと風刺漫画を駆使して当時の王室、貴族、財閥、行政者を問わず批判の槍玉に挙げるこの雑誌の名前に相応しい物であったし、また、1841年に創刊されて1992年に廃刊されるまで、150年の寿命を保ったのは、Indomitable の形容詞に値するであろう。小説のジャンルに picaresque novel (悪漢小説) があるが、[Punch-and-Judy] は picaresque puppet show と呼ぶに相応しい。

そして、*Vanity Fair* の女主人公 Becky Sharp は、まさに女性版の Punch であり、この小説は、Becky の活躍を追いながら、当時の世相とその中で踊る snob 達を風刺する女性版の picaresque novel と呼ぶことができる。

注：snob は日本語に訳し難い英語である。[俗物] では一般的過ぎ、イメージが湧かない。[いい振りこき][ええ格好し] あるいは [気障っぺ] あたりが適切か。

図 2



PICTORIAL POSTCARDS
1894-1994

パンチ&ジュディは海浜リゾート地にはつきもの。海浜保養地から出された絵はがきの100周年を記念してイギリス郵政省が1994年春に発行した切手と絵はがきのセット。

伊東市プッペンハウス・ヨシノ所蔵の Punch and Judy の装置と人形と記念切手
(研究社：英国文化の世紀4 『民衆の文化誌』より転載)

連合軍が Waterloo でナポレオン軍を迎え撃つために、Brussels から出動した際の Becky の対応について、Thackeray は次のように語る。

「よしんばこの小説に英雄がいなくても、少なくともここに一人の女傑ありと言わせてもらいたい。その朝出動して行った英国陸軍のなかに、偉大な公爵閣下を含めても、この不安と困難とを前にして、わが不屈なる副官夫人ほど、冷静で落ち着き払っていた人は、一人としていなかった筈だからである。」(岩波-3-17)

If this is a novel without a hero, at least let us lay claim to a heroine. No man in the British Army which has marched away, not the great Duke himself, could be more cool or collected in the presence of doubts and difficulties, than the indomitable little aide-de-camp's wife. (原文 P.287) (下線は筆者による)

まさしく彼女が女性版の Punch であることを裏打ちしている。この小説の副題である A Novel Without a Hero の日本語訳を「男性の英雄が一人もない小説」と訳したくなる。この副題の意味について色々な解釈がされていることは、承知しているが。

5. 鏡

貧しい絵描きと歌手との間に生まれた Rebecca (Becky) Sharp が、父の死後に預けられた Pincarton 女史の学園を去り、親友 Amelia の家に一時滞在した後、従男爵 Sir Pitt Crawley 家の家庭教師を経て、その次男 Rawdon Crawley 大尉と駆け落ち結婚して、Lady に相応しい富を求め、卑賤な素性を物ともせず、持っている容貌と才能とを駆使して、上流階層に潜り込もうとする、不屈な女性の一代記と、彼女に関わりを持つ上流人士の snob 振りを描く (前にも触れた) picaresque 小説である。

この女主人公が行くところ、彼女に接する上流あるいは中産階層の表面を装う snob 振りが、その仮面を剥がれて正体が暴露され、虚栄心が白日に晒される面白さがこの小説の人気の因であるが、集英社の『世界文学全集9 スタンダール』の巻末解説で古屋健三が次のように言っている。「ところで、スタンダールは、小説を定義して、街路に沿って運ばれる鏡だと言っている。小説が、作者に背負われて、実人生を写しながら移動して行く鏡であるとするならば、主人公は小説の内部の世界を写しながら移動する鏡と言えよう。」

まさしく Becky は十分に鏡の役を果たしている。ただし、彼女がいくら鏡を差し出しても、そのあるが儘の姿しか写せない人物もいる。例えば Dobbin 中佐（退役時の階級）である。表も裏も無い誠実な紳士だからである。それゆえ、Becky は Dobbin を敬遠し、Dobbin も Becky の正体を見透かして相手にしない。まったく次元の違う世界を歩いている。両者の歩む道が交差することがあっても、Becky と関わろうとする人に Dobbin が警戒を呼び掛けるのが関の山である。彼以外はすべて彼女の演技に幻惑されて、怒り、恨み、軽蔑などの感情に駆られて正体をさらけ出すのが、この小説の面白さである。くれぐれも道徳心を振りかざして Becky を断罪してはならない。あくまでも Becky は Thackeray が [虚栄の市] に群がる人々の実相を描き出すために操る人形であり、鏡なのである。

第2章 19世紀前半の英国社会

1. 自由化と民権拡大

ナポレオン戦争に勝利を収めてから5年間、戦後不況を反映して反動政策のもとで戦時中同様に弾圧的だったトーリー(保守党)内閣は、不況の回復と工業化の進展による中流商工階級の台頭によって、政策を大きく転換して、自由経済政策に踏み切るかたわら、急進主義者、労働者に対する団結禁止法を廃止し(1824)、非国教徒を公職から排除していた審査法を廃止し(1828)、30年代に入って第一次選挙法改

正（1832）により有権者の範囲を拡大し、労働者の悲惨な生活苦の問題を残しながらも、富裕な階層がその厚みを増して発言力を強めていった。この傾向を決定的にしたのが穀物法 Corn Law の廃止（1846）で、19世紀始めから特に顕著になった工業化、都市化の波に押されて、この国が農業国から工業と貿易の国に変わったことを宣言したに等しい改革だった。

村岡健次『ヴィクトリア時代の政治と社会』（ミネルヴァ書房 1980）から一部を引用すると、「この時期（1815～1840）は……持続的経済成長の時代だった。……中流階級については、彼等の年収と生活水準とが、年2～3%の持続的な成長率のなかで、着実に上昇し続けたことは、全く疑いの余地が無い。……この天井知らずの経済成長が、中流階級の消費生活の変化を通じて、始めて一つの革命をもたらした……史上最初の「消費革命」の一特徴は、中流階級に虚栄の生活態度を抜き難く植え付けてしまったことで、世はまさに Thackeray の「虚栄の市」となった。彼等の生活目標は、一段上のジェントルマンで、彼等の年々の消費の増大は、ジェントルマンの体面を獲得するのに必要な道具立てを購入することに充てられた。」（P.122～3）とあり、本書の173頁に1823年の夫婦と子供3人で年収1,000ポンドの標準的中流家庭の年間家計支出を百分比で示している（表1）。

この表で分かるように、召使と馬車は、必須の家計支出ではなく、[ジェントルマンの体面を得るための道具立て]である（図3）。この二つが紳士階級であることを示す status symbol であるならば、紳士階級に属しない中流階級には、snobbery の symbol ということになる。また、紳士階級の家庭に必要な使用人は最低3人とされていた。雑役と馬丁を兼ねる男性一人、kitchen maid と parlour maid とである。紳士階級とは、知的な専門職は別として、報酬や営業収入を目的として働く必要が無い階級であり、従って妻も家事労働から自由でなければならなかったからである。

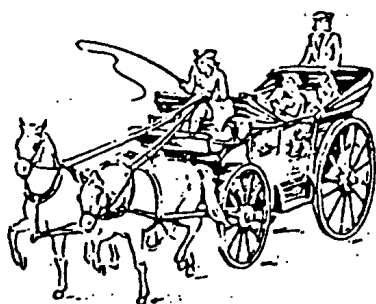
「19世紀の50年代以降ともなれば、鉄道の発達は目覚ましく、国内主要幹線の複線化が始まっていたのに、馬車は無くなるどころか、逆

表1 中流家庭の消費生活（夫婦と3人の子供の場合）

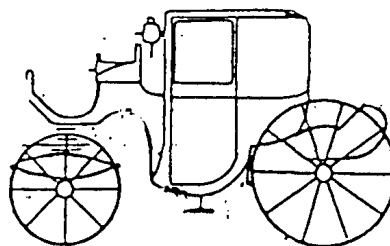
（単位：％）

1	食費等基礎的 生計費	食費	26	} 33
		石炭・ローソク・石鹼など	7	
2	召使いと自家 用車	馬と馬車	10	} 22
		男の召使い	8	
		女の召使い	4	
3	衣 料 費	男ものの衣服	4	} 12
		女ものの衣服	5	
		子供の衣服	2.5	
		小間物	0.5	
4	家賃・税金な ど	家 賃	8	} 12
		税金と修繕費	4	
5	接待費・医療 費など	パーティ・宴会費	2	} 3
		医 療 費	1	
6	特 別 費	教 育	4	} 8
		小 遣	2	
		雑 費	2	
7	貯 金			10
	計			100

図3



barouche



the coupé (brougham)

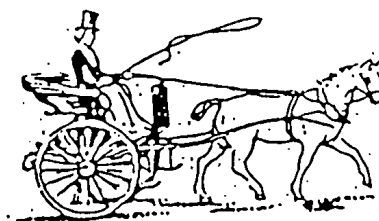
に増加の一途を辿った。次頁の表（表2）は、税金の対象になった非営業用（自家用）の数字である。鉄道が普及しても、自動車が無い当時は、近距離の旅行には馬車のほうが便利だったし、何よりもそれが社会的地位の象徴だったから、生活が豊かになった人々は、競って馬

表2 馬車の増加（イングランドとウェールズ）

(単位：千台)

年	四輪馬車	二輪馬車
1814	23	31
1834	49	50
1844	62	33
1854	68	137
1864	102	170
1874	125	285

図4



gig

車を買入れた。特に開業医にとっては、馬車は必需品で、馬車に乗って往診しない開業医は、世間から信用されないほどだった。……『だが、馬車は確かに良い物だ。人様の家に行っても、絨毯を汚すこともないし、馬車が持てないばかりに、大勢の人が医者になることを諦めてくれる。しかし、今を時めく名医達が、駆け出しの頃には、馬車を持つために、いかに苦勞したことか』と述懐する医者もいた。実際、馬車を持とうとすれば、馬と馬小屋、それに少なくとも一人の馬丁が同時に必要だったから、誰でも持てる訳にはゆかなかった。最も手輕な2輪のギグ（図4）を持つためには、最低で年750ポンドというのが、当時の常識だった。」(P.176~7)

注：55ページのLondonの風景写真では、1870年代でも通りに馬車が氾濫しているが、1910年代でもまだ馬車が幅を利かしている。ほぼ完全に自動車に代わったのは1920年代である。ただし、英国では自動車に使われる用語に馬車時代の名残りが見られることが多い。

2. 富裕な中流階級の Gentleman 志向

商工業の経営者、大企業の経営陣などに属する富裕な中流階級が、次に望むことは、gentleman 階級に登ることである。ヴィクトリア時代を代表する美学者、哲学者、社会改良家 John Ruskin は、次のように述べている。「一財産こしらえて成功し、かつては手の届かなかった上位の人々と付き合うことができるようになるや、自分が生まれついた状態にとどまっていることは、まったく恥ずかしいことになった。こうして、今日では、すべての人々が、gentleman たるべく努力することが義務なのだと思えるようになっていく。」(*Pre-Raphaelism and Other Essays and Letters*, Everyman's Library)

gentleman になることを義務とする考え方は、決して非難すべきことではない。次第に墮落し弱体化していた世襲の地主階級に代わって、中流階級が紳士階層になって、この国の政治の活性化や国民の moral を担うことは、時代の要請でもあったのである。この時代の超大物級の人物が一代貴族として爵位を与えられたことも、この証左であろう。

だが、富裕な中流階級でも、紳士階級との間には厚い壁があった。かつて読んだある小説の中にはこんな言葉があった。

「紳士は一代でなれるものではない。また、金さえあればなれるものではない。」

It takes more than one generation to make a gentleman. And money alone cannot accomplish it.

村岡氏は、前述の著書で、紳士階級に入るのに3代掛かった好例として、1834年から1846年まで首相を勤め、金本位制を復活し、穀物法を廃止し、自由貿易の進展に大きな貢献をした Sir Robert Peel を挙げている。

初代 Peel は、綿工業の近代化を図り、技術改良と経営の拡大に成

功し、約14万ポンドの遺産を残した。

その3男2代目 Peel は、父の企業をさらに発展させ、gentleman を目指したが、学歴が文法学校 (grammar school) だけであり、事業経営者として活動している故に、望みが叶えられなかった。政治に関心を向け、貧窮に陥ったある侯爵から選挙区を買い取って下院議員となり、准男爵に叙されたけれども。(現職の事業経営者が紳士と見做されない理由は、はっきり言えば、金儲けに専念している人だから、ということである)。彼は次の世代に期待を掛け、6人の息子達のうち5人を public school から Oxbridge に進学させ、娘達3人を紳士階級に属する男性と結婚させて、やっと3代目で紳士と自他共に認められる Robert Peel 首相を作り出したのである。さきに述べた Hogarth の [Marriage à la Mode] を連想させるが、中流階級から本気で紳士階級に登ろうとするなら、これだけの年月と財力と努力が必要となる (表3)。とても不可能だから、せめて紳士の生活のスタイルを真似て、満足感を得ようとする snob 達が氾濫するのも、無理からぬことである。そして、金銭さえ払えば手に入る馬車が一番手っとり早く紳士気分にしてくれるのだ。

表3

ジェントルマン	↑ パブリック・スクール オックスブリッジ卒業者 ↓	貴族	上流階級
	ジェントリ		
ノン・ジェントルマン		(ハ)海軍士官 (ホ)陸軍士官 (ニ)上級官吏 (ハ)内科医 (ロ)法廷弁護士 (イ)国教会聖職者	中流階級
		(4)借地農、農民 (3)商店主など (2)中小工業者、職人、 ショーン (1)商工業ブルジョワ階級 上欄以外のプロフェッ	

第3章 VANITY FAIR に現れる馬車の諸相

Thackeray は、この作品で馬車とこれに関連する記述を、執拗と思われる程に繰り返す。しかも、単に交通手段として扱う場合は別として、その種類、形状、付属物など何らかの attributive を伴う記述が100近くに及ぶ。

英語の普通名詞、特に単数、複数を持つ可算名詞は、それを読んだり聞いたりして、視覚化できるか否かで分類できる。例えば、a bird と言っても何もイメージが浮かばないが、an eagle とか a sparrow と言えば、その大きさ、色、形状が頭に浮かぶのである。同じように、a carriage は、その用途などは概念化できるが、視覚化はできない。この作家が関心を持つのは、使われている馬車を特定することによって、使用者の地位、品性、趣味、あるいはその馬車を必要とする心理や状況が分かり、この小説の plot に大きな影響を与えること、なのである。例えば a buggy と言えば、形、大きさ、車輪の数、引き馬の数、馭者の位置に至るまで目に浮かぶのである。ただし、このことは、ヨーロッパ、アメリカに通用することであって、日本では通用しない。日本で [馬車] と言えば、真っ先に目に浮かぶのは [荷馬車] であり、[乗用馬車] を思い浮かべる人は例外であろう。[荷馬車]すら明治維新前の日本に無かった。その理由を挙げようとするれば、政治の問題、人間の問題、馬の問題、道路の問題、地形の問題などが複雑に絡み合って、それだけで優に日本の風土論の論文を書き上げることができる。ここでは、『エドウィン・ダン—日本における半世紀の回想—』（エドウィン・ダン顕彰会 1963）から高倉新一郎の次の文を引用するに止めよう。明治初頭の状況である。

「わが国にも古くから牛馬が飼われていたが、牛は荷を付け車を
 輓くもの、馬は人を乗せ、荷を付けるもので、今日のように、肉
 牛・乳牛・車を輓く馬などは無く、飼い方も合理的ではなく、質も

劣っていた。」

1. 貴族階級・紳士階級と馬車

まだ商工業者が発展途上にあった時代では、英国の自家用馬車はいわゆる王侯貴族がもっぱら用いていた。庶民の乗り物は乗り合い馬車であったが、この歴史はかなり古い。西暦紀元の始め頃にローマ帝国の軍がこの島を占領し、北方の異民族に対する防衛のために軍隊の移動を容易にし、首都 Londinium（現 London）と地方との連絡を密にするために、幅約5メートルのいわゆる Roman road 網を建設した。この占領は約4世紀続いたので、この島は完全にローマ帝国の交通圏にあったのである。

19世紀に入り、前に述べたように商工階級の富裕化に伴い、大地主達が経済力を失うにつれ、彼等の馬車の保持が次第に難しくなり、かなりの無理算段を重ねる貴族達も出てきた。このあたりの事情が、この小説でも時々現れる。

Becky が、Amelia Sedley の家から彼女が governess（家庭教師）として Sir Pitt Crawley に連れられて Hampshire の Queen's Crawley に赴いた時の様子を、Becky が Amelia に書き送った手紙で知らせているが、London の乗り合いの出る宿屋から、Pitt 卿と乗り合いで Hampshire に行く途中、雨が降り出すと、Becky は外（屋根）の席に出される。この乗合いは卿が貸し主で、客が中に入りたいと言うので、席を明けるためである。それから卿は目的地まで自分で馭者をしてゆっくり走らせる。自分があまり飼料を与えていない弱い馬だからである。

「しかし、立派な馬4頭をつけた、一杯紋章で飾った馬車が、クイーンズ・クロウリの手前4マイルにあるマッドベリまで出迎えていたので、私たちは従男爵のお屋敷へ堂々と乗り付けました。」（岩波-1-137）

A carriage and four splendid horses, covered with armorial bearings, however awaited us at Mudbury, four miles from Queen's Crawley, and we made our entrance to the Baronet's park in state.
(原文 P.67)

注： 従男爵 baronet は、英国だけにある爵位で、James 一世（在位1603-25）が、スコットランド王と併せて英国王になった時、王室財政の窮乏を補うために、男爵と騎士爵との間に設けたものである。日給8ペンスの兵士を30人3年間養う費用1,095ポンドを献納した地主に授与した。いわば売り買いされた爵位である。大抵大地主だった、例えば、詩人 Shelley の父 Sir Timothy Shelley は、西サセックスの Warnham の数万エーカーの大地主だったし、Tennyson が *In Memoriam* で哀悼した親友 Arthur Henry Hallam の母方の祖父は、Bristol 近く Clevedon Court を country house とする大地主だった。この屋敷に滞在して、Thackeray は *Vanity Fair* を書いたのである。

この制度にやや似た制度が戦前の日本にもあった。現在の参議院の前身である貴族院に、多額納税議員という枠があった。富裕で多額の税金を納めた人達で、院の名称からして貴族扱いだったのである。なお、従男爵は厳密に言えば貴族ではない。

次の文章も、Sir Pitt の見栄っ張り振りを、馬車に託して語っている。

「ピット卿は、田舎者の癖に、領地にいる時は、なかなか体裁を構う方で、4頭立ての馬車に乗らなければ外出しない程で……」(岩波-1-159)

……boor as he was, Sir Pitt was a stickler for his dignity while at home, and seldom drove out but with four horses……(原文 P.77)

だがこの従男爵は吝嗇極まりない人物で、文章も碌に書けないのに金銭に関する訴訟ばかり起こして、敗訴しては益々貧しくなるという

偏屈な人間でもある。この人のその後については、また本稿に再三登場することになる。

この小説の主要な登場人物ではないが、馬および馬車に関わって語るべき貴族は、the Countess of Bareacres である。彼女は夫と共に、ベルギーの Brussels で、軍人達とレセプションに加わったが、Becky 達を無視して威張っていた。英国軍敗戦の誤報を信じて、本国に逃げようとした時、馬車用の馬が手に入らず、Rawdon が Becky に残して行った馬 2 頭を譲って欲しいと侍女を使いに出すが、『馬が必要なのは侍女なのですか、必要な方が頭を下げて来なさい。』と断る。(岩波-3-57)

数年後に、再びこの貴族が登場する。その時には、

「ベヤレイカズ伯爵夫人の馬車は、皆執達吏の手に差押えられていた。」(岩波-4-180)

また数年後に、今度は豪勢な馬車とともに登場する。貴族達や中流の人々が夏の旅行に大陸に向かう汽船のなかである。

「ベヤレイカズ卿になると、遊山馬車に昔のロシア式の幌馬車、それから小荷物車まで揃えていたが、……それにしても、ベヤレイカズ卿が旅費だけは現金で持っていたというのが一つの不思議だった。」(岩波-6-44)

my Lord Bareacres' chariot, britska, and fourgon, ……It was a wonder how my Lord got the ready money to pay for the expenses of the journey. (原文 P.608)

それはユダヤの紳士達に聞けばすぐ分かると、全部借金で賄っていることを示している。膨大な借金で支えられている貴族の威厳なので

ある。

2. 中流階級の豊かな生活の象徴

さきに触れたように、この時代の中流階級の富裕化の顕著な現れは、自家用馬車を持つ家が増加したことである。Thackeray は、この豊かさを、つぎのように表現する。

「しかしまあ、何も、馬車の一台ばかり置いて、年に3,000ポンドばかり収入があるということが、人生無上の幸福でもなければ、神様の最後の審判でもないのである。」(岩波-3-188)

Well, well—a carriage and three thousand a year is not the summit of the reward nor the end of God's judgment of men. (原文 P.375)

また、こんな表現もある。

「しかし虚栄の市では、幸福などというものよりも、爵位と4頭立ての馬車のほうが、ずっと大切な玩具なのである。」(岩波-1-155)

—but a title and a coach and four are toys more precious than happiness in Vanity Fair : (原文 P.75)

また、家の盛衰を馬車で表現することもよくある。次はナポレオンがエルバ島から脱出して再挙したとの報に、債券が大暴落したあおりで破産に至った Sedley 氏の夫人 (Jos と Amelia の母) が零落を嘆く。

「私はこうして零落しています、もとは馬車も置いた身分だったが、今では歩いて外出します。」(岩波-3-192)

I have sunk in life : I have kept my carriage, and now walk on foot.
(原文 P.377)

また、老セドレ氏も、晩年に、故人となった妻を偲んで、Ameliaに愚痴る。

「お母さんが生きていて、もう一度 Jos の馬車に乗せてやったら
と思ってねえ。お母さんも元は自分の馬車があって、それに乗ると
よく似合ったもんだがなあ。」(岩波-5-172)

I was thinking of my poor Bessy. I wish she was alive, to ride in
Jos's carriage once again. She kept her own, and became it very
well. (原文 PP.580-581)

Amelia の夫 (Waterloo で戦死するが) George Osborne の妹 Maria の
結婚相手を選ぶ条件にも馬車が入っている。

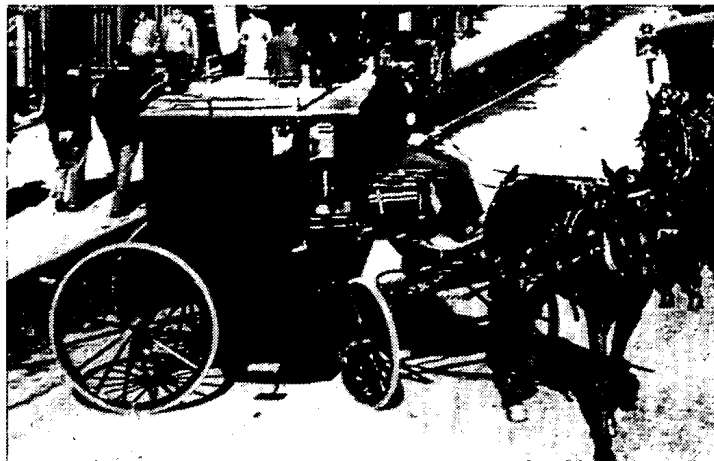
「マライア・オズバン嬢になると、Hulker, Bullock & Bullock 商
会のフレデリック・オーガスタス・ブロック氏に思いを寄せてい
た。しかし、彼女のなんか実に立派な思い方で、息子さんの代わり
に、親父さんのほうのブロック氏でも、一向に構わなかったのであ
る。

と言うのは、彼女が欲しいのは、育ちの良い令嬢としてさもある
う、Park Lane の邸宅と、Wimbledon の別荘と、立派な馬車と、2
頭の素晴らしい背の高い馬と、馬丁達と、堂々たる商会の年収の4
分の1とであって、フレデリック・オーガスタス氏が好きなのは、
こうした有利な条件の全てを彼が表していたからこそだった。」(岩
波-1-213)

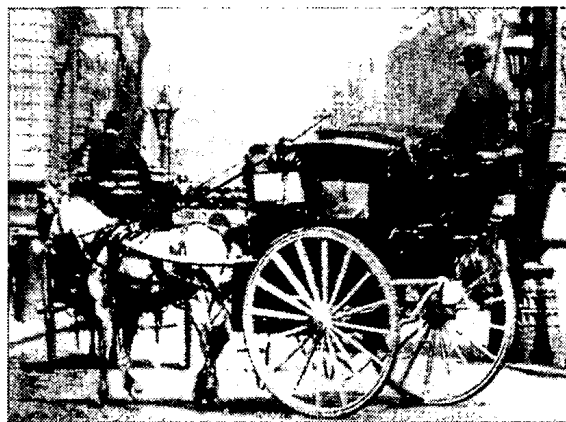
Miss Maria Osborne, it is true, was "attached" to Mr. Frederic

Augustus Bullock, of the firm of Hulker, Bullock & Bullock ; but hers was a most respectable attachment, and she would have taken Bullock Senior, just the same, her mind being fixed as that of a well bred young woman should be, —upon a house in Park Lane, a country house at Wimbledon, a handsome chariot, and two prodigious tall horses and footmen, and a fourth of the annual profits of the eminent firm of Hulker & Bullock, all of which advantages were represented in the person of Frederic Augustus. (原文 P.105)

図3 2種類の hackney coach (辻馬車)



cab



hansom

図 4



図は、1870年頃の Queen's Street. London の風景である。馬車で交通が渋滞している。
(Walks in Old London, published by Barnes & Noble Inc. © Peter Jackson 1993より転載)

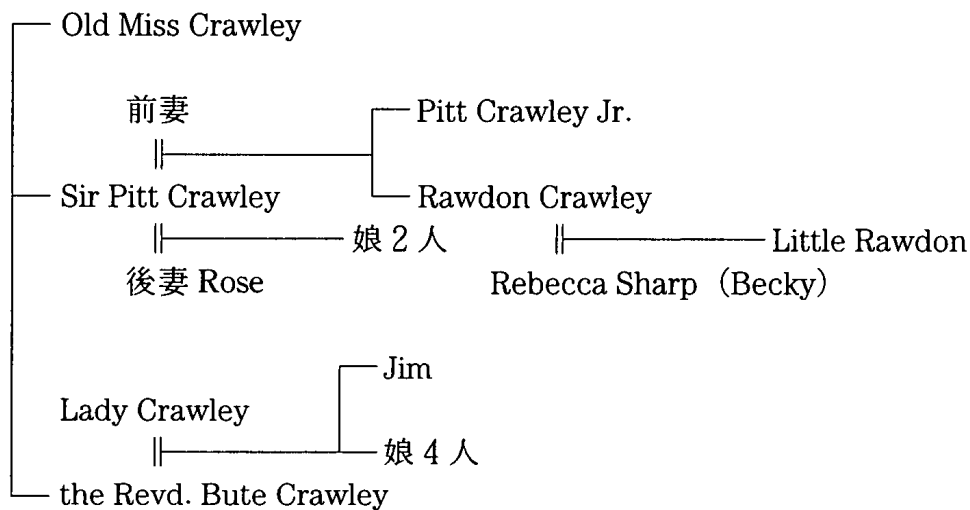
次は、Osborne 大尉未亡人の Amelia が、貧しい生活を送っているが、周囲の人々にその美しさを崇められている状況を、ある富豪の未亡人と比較して語られている文である。

「Amelia が、プランテン商会を経営している富豪マンゴウ家の御後室で、……ケンジントンの王室御料の御厩にもいないような立派

な栗毛の馬に馬車を曳かせるというような大した身分であったにしても……近所の商人達は、彼女が門口を通る時、……現在淑やかな若い未亡人である彼女に必ず払う以上の尊敬を払いはしなかったろう。」（岩波-3-197）

If she had been Mrs. Mango, ……who drove about the parish with magnificent yellow liveries and bay horses, such as the royal stables at Kensington themselves could not turn out, ……

このあたりで、Becky の夫 Rawdon Crawley の一族を一覧しよう。



Old Miss Crawley : Sir Pitt の異母姉、母から10万ポンドに近い遺産を受け、豊かな生活を楽しんでいる。この人の遺産を狙って、色々な人間模様が演じられる。

Pitt Crawley Jr. : 外交官ではパツとした出世ができず、帰郷してこの地に住んでいる。熱心なキリスト教信者で一族の風紀係。

the Revd. Bute Crawley : Queen's Crawley 教区の司祭、教区が兄 Pitt の資産なので楽ではないが、社交とスポーツ好き。

Lady Bute Crawley : 子供達の将来を心配して、なんとか Miss Crawley の遺産を全部頂こうと画策する。

Rawdon Crawley：粗暴で不良性がある軍人で、賭博の名人。頭の回転が遅いので、妻 Becky にいつも振り回されていたが、Lord Steyne とのことで Becky と生涯別居に至る。

ここで Crawley 一族を紹介するのは、Miss Crawley の財産をめぐる騒動が、Becky と Rawdon の結婚を契機となる、この小説の前半の主要なエピソードだからである。

Miss Crawley は、この一族の中で最も裕福であり、Becky の利発さが気に入っていた。彼女の豊かさがやはり馬車によって描かれている。

「こうして銀行にそんな残高があれば、年取った婦人になんと値打ちが出ることであろう。殊にそれが身内の人だと（……）みんながどんなにやさしくその人の欠点なども大目に見て、どんなに親切な優しいおばあさんにしてしまうか知れないのである。ホップズ・アンド・ドップズ商店に買い物に行っても、そこの若い店員がお愛想笑いをしながら、太った喘息持ちの馭者の乗った、菱形の紋章付きの彼女の馬車まで、どんなに丁寧に送って来るか知れない。」（岩波-1-163）

What a dignity it gives an old lady, that balance at the banker's !
How tenderly we look at her faults, if she is a relative (……) , what
a kind, good-natured old creature we find her ! How the junior
partner at Hobbs and Dobbs leads her smiling to the carriage with
lozenge upon it, and the fat wheezy coachman ! (原文 P.79)

(注：lozenge：独身女性や未亡人が用いる菱形の女紋)

おそらく、彼女の馬車は贅沢に作られたものであろう。彼女は Brighton に住み、London の Park Lane に town house を持っていた。Queen's Crawley は Hampshire だからそう遠くはなく、ちよくちよく

Queen's Crawley に来るが、Pitt よりも Rawdon を可愛がり、いずれ自分の遺産を Rawdon と Bute に分与するつもりだと言っていた。Bute 夫人は、Becky の素性を調べ上げ、Rawdon と結婚するように仕向けて、その後に Becky の素性をばらして Rawdon に対する信用を失わせ、遺産を一人占めすることを画策した。夫の借金の返済、息子の学費、魅力に乏しい4人の娘の持参金などを考えてのことである。後々のことになるが、Rawdon と Becky を Miss Crawley の傍^{そば}から追い払うことに成功したのだが、受け取った遺産は期待に反して5,000ポンドに過ぎなかった。何もしなければ、少なくとも30,000ポンドになっただろうに。

このあたりの Thackeray の筆は、さすがに *the Punch* の執筆者らしく漫画的である。

私の若い頃に、佐々木邦というユーモア作家がいて、叔母さんだったかの遺産の相続を目当てに色々と画策したが、一銭（もう死語になったが）も貰えなかった話を面白おかしく書いたが、この作家の本職は旧制中学校の英語教師で、普段はニコリともしない謹厳な人だったらしい。Thackeray を読んでいたかどうかは詳^{つまび}らかではない。

さて、5,000ポンド（大金だが）しか遺産を貰えなかった Mrs. Bute は、

「知人を牧師館に招いて色々ともてなして楽しませたが、その度数もクローリ老嬢の遺産がまだ入らなかった頃からみると、ずっと多かった。だから外から見ると、その一家が思った程の遺産が貰えなかったとも見えないし、また度々世間に顔を出すことから判断すると、家の中が火の車で、食べ物も碌に食っていないとは、誰にも思えなかった。」（岩波-4-8）（原文省略）

そして娘達が社交に頻繁に出掛けるので、

「だから、野良から引っ張ってきた馬をつけた彼等の馬車は休む

暇も無い位で、おしまいには世間の人達も、その4人姉妹が伯母から遺産を貰ったのだらうと思うようになった。」(ibid.)

……and their carriage, with the horses taken from the plough, was at work perpetually, until it began almost to be believed that the four sisters had had fortunes left them by their aunt. (原文 P.386)

遺産があるから何時でも払って貰えると債権者に安心させる嘘である。

これに反して、遺産を20ポンドしか貰えなかった Becky は、げらげらと笑い出して、悄気ていた Rawdon もそれにつられて笑って終わった。

ここで少し足踏みして、Thackeray の Mrs. Bute に対する姿勢を再検討したい。前ページの夫人の虚勢を彼は嗤っているようでそうではないのである。むしろ同情しているのである。他の数ヶ所で Mrs. Bute が夫の賭け事や社交などに当てられる出費のため、家計の遣り繰りに苦心しながら、5人の子供達を育て上げてきた忍耐と努力と、子供達に対する豊かな愛情を同情と尊敬を以て描いている、例えば、

「善良な立派な母親としてやって良いことは、ビュート夫人はなんでもやった。サザンプトンのヨット倶楽部の人達を、ウィンチェスタの大寺院の坊さん達を、同じくウィンチェスタの兵営の士官達をはるばると呼び寄せた。……実際、愛する娘達のためには、母親というものはどんなことでもするのである。」(岩波-4-9)

Everything that a good and respectable mother could do Mrs. Bute did. She got over yachting men from Southampton, parsons from Cathedral Close at Winchester, and officers from the barracks there. ……What will not a mother do for the benefit of her beloved ones?

(原文 P.387)

いわゆる gentry (紳士階級に属する人達) には二通りあった。職業を持たなくても、不動産その他の収入で暮らせる landed gentry と、弁護士その他の知的職業や聖職から離れると収入の道が無い landless gentry とである。後者の場合、家長が死去すると、家族はその瞬間から路頭に迷うことになる。娘達は幸運に恵まれなければ old spinster (嫁かず後家) になる可能性が高い。Bute 司祭の場合は、教区そのものが兄 Pitt の資産なので益々不安な立場にある訳で、なんとか娘達を早く縁付けたいと (特に母親は) 必死なのである。Jane Austen の *Pride and Prejudice* の母親 Mrs. Bennet も Mrs. Bute とほとんど同じ立場なのである。恥も外聞も気にしてられないのだ。この事を Thackeray はよく承知しているのである。

3. Snobbery の象徴

この前に述べたように、[馬車] が富裕の象徴であり、金持ちだけが馬車を持つのならば、なにも話の種にならないのだが、周囲にそんな金持ちがいれば、「自分も」という気持ちになり、無理算段する。いっそ無一文に近い人達はまったく諦めて無関心になれば、それなりに幸せだろうが。

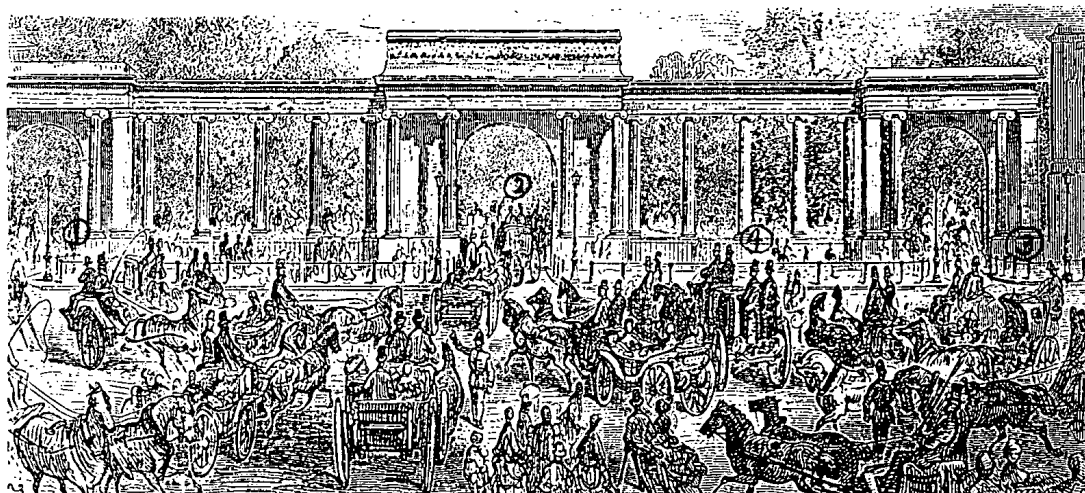
そういう訳で、紳士や金持ちの真似をしたがる snob 達は、手っとり早く馬車を使って紳士気取り、金持ち気取りをすることになる。馬車が目にはっきり見えるし、誰でも持てる安直な道具ではないからである。だからまた色々と問題の種にもなる。

「あのジェンキンス家の人達が、近衛兵のように背の高い馬丁達などを従えて、大きなバルーシュ型の馬車に乗って、公園に現れるなどということは、正直な話が、私には死ぬまで不思議な謎の儘であろうと思う。もっとも、馬や馬車は借り物で、あそこの召使達は賄い費も込めた給金だということは私も知っている。それでも三人

の男とあの馬車とでは、どんなに安く見積もっても、年に600ポンドは掛かるだろう——その上、結構な御馳走はするし、二人の息子をイートン校に上げている、娘達には立派な家庭教師やお師匠さんまでつけている、外国へは旅行する、秋にはイーストバンカワーキングに出掛ける、毎年主催する舞踏会には、ガンタ亭から夜食を取り寄せる、……まあそんな訳だから、少しも悪気があって言うのではないが、いったいジェンキンス家は、どうやって遣り繰りしているのか、誰しも不審に思わずにはいかないだろう。

ジェンキンスとは何者であるか？ みんなが知っている通り、年俸1,000ポンドの文書局事務官である。細君に財産でもあるのか？ とんでもない！ バッキンガムシャの小地主の11人兄弟の一人ではないか。……ジェンキンスは、あの収入でどうしてやってゆくのだろう？……彼の友達もみんなそう言っているのだが、よく公権を剥奪されないものだ。」(岩波-3-144) (公権剥奪：汚職した公務員に対する厳罰である)

図5



バルーシュ (barouche) 型：(上図参照) この小説の登場人物の虚栄心を表すのによく使われる。open型が普通である。大半は barouche であるが、1 は dogcart、2 は cab、3 は hansom、4 は brougham である。(G. ドレ画)
『ドレ画 ヴィクトリア朝時代のロンドン』(小池滋編著、社会思想社) より転載

また、次のような人種もいる。

「実際、ロンドンの街に出てみると、こっちは歩いているのに、向こうは堂々と馬車なんかに乗り込んで、上流の人には大騒ぎされる、商人達には馬車の窓越しに頭を下げさせる、自分ではしたい放題のことをしているという風でいて、さて何で食っているのやらさっぱり分からないといったような連中に、幾人出会うか知れないのである。」(岩波-2-53)

Indeed who is there that walks London streets, but can point out a half-dozen of men riding by him splendidly, while he is on foot, courted by fashion, bowed into their carriages by tradesmen, denying themselves nothing, and living on who knows what? (原文 P.160)

「例えば、我々は、ジャック・スリフトレス君が馬に跨がって傲然と公園を練り歩いたり、ブルーム型の馬車でペル・メル街を走ったりするのを見掛ける。そして彼の魔法の皿に盛られた晚餐の供給にも預かる。あまり不思議なので、『一体、君は何時からこんなことを始めて、何時になったら止すんだね?』と聞くと、『そりや君、僕はヨーロッパのどこの首府に行っても借金をしてあるのだからね』」(岩波-2-53)

We see Jack Thriftless prancing in the park, or darting in his brougham down Pall Mall : we eat his dinner served on his miraculous plate, "How did this begin," we say, "or where will it end?" "My dear fellow," I heard Jack say, "I owe money in every capital in Europe." (原文 P.160)

Rawdon と Becky の夫妻も、おおよそ上記のような生活をしていた。

「彼 (Rawdon) は、一切有る時払いのつけで呑気に暮らしてい

た。つまり彼には借金という大きな資本があった。それを上手に使っていけば、大の男が長年立派にやっていけようし、また、それさえあれば、遊び回っている人間でも、小金を持っている人の百倍も立派に暮らしていけるのである。」(岩波-2-53)

He (Rawdon) lived comfortably on credit. He had a large capital of debt, which laid out judiciously, will carry a man along for many years, and on which certain men about town contrive to live a hundred times better than even men with ready money can do. (ibid)

後妻の Rose が死去して程なく、Becky が老嬢の看病をしている Park Lane に、Sir Pitt が突然やってきて、『私の妻になってほしい』と Becky に求婚するが、Becky はすでに結婚しているとお断りする。でもいずれ考え直すだろうと、多寡を括っていた Sir Pitt が Becky の結婚相手が自分の次男の Rawdon だと知って、怒りのあまり、帰宅してすぐ Becky の残っている持ち物を辺りにぶちまけて荒れ狂う。それから Sir Pitt はすっかりグレて、下男頭の娘を情婦にして、自分の馬車で二人で遠乗りしたり、色々な物を（親から貰った物も含め）くれてやったり、一族や従男爵仲間の恥じ晒しになり、近隣の嘲笑の的になったりして、やがて死を迎える。その知らせを受けて、Rawdon は、真っ先に Queen's Crawley に駆け付ける馬車の算段を始める。

「『急ぎの馬で行くのにひどく金が掛かるんだろうな。』とロードンがぼやいた。『サウスダウン家（注：兄 Pitt 夫人の実家）の馬車に乗せて貰えば。……でも、それを止して……私達は乗り合い馬車にしましょう。その方が皆さんの気に入るでしょう。地味に見えますから。』」(岩波-4-34)

“Posting will cost a dooce (i e. deuce) of a lot of money,”

“We might take Southdown’s carriage, …… : but, no… I intend that we shall go by the coach. They’ll like it better. It seems more humble……” (原文 P.401)

さすがに Becky である、この際格好をつけて上等な馬車で行くと、従男爵を継ぐ兄 Pitt の姻戚達や、Bute 一家の反感を買うと計算した訳だ。

一族が集まり、葬儀のミサの後、墓地まで行って埋葬となるが、その情景を描写する Thackeray の筆は皮肉に満ちている。

「ピット卿の遺骸をお墓まで送ってやろうと思われる方は、随ついておいでになるがいい。葬式の当日になると、遺骸はいとも丁重に墓所に運ばれる。黒い馬車に乗った家族達は、今にも涙が溢れてきそうに、ハンカチを鼻に当てている（ただし涙は出てこない）、葬儀屋と従業員は、いかにも悲痛な顔をしている。借地人達は、新しい地主さんのご機嫌取りに会葬している。近くの従男爵達の馬車の中は空で、ただ馬車だけがひどく悲しげに 1 時間 3 マイルの速度で続いて行く。牧師さんは「逝ける我らの親しき同胞はらから」について紋切り型の説教をする。我々は遺骸が目の前にある間は、どこまでも虚栄劇を演じ続け、虚偽と儀式とでそれを取り囲み、荘厳に安置して、金ピカの釘を打ち、ピロウドの布で包み、最後に嘘八百を並べた墓碑をその上に立てて、義務を終える。」(岩波-4-54)

Those who will may follow his remains to the grave, whither they were borne on the appointed day, in the most becoming manner, the family in black coaches, with their handkerchiefs up to their noses, ready for the tears which did not come : undertakers and his gentlemen in deep tribulation : the select tenantry mourning out of their compliment to thr new land lord : the neighbouring gentries’ carriages at three miles an hour, empty, and in profound affliction:

the parson speaking out the formula about “our dear brother departed”. As long as we have a man’s body, we play our Vanities upon it, surrounding it with humbug and ceremonies, laying it in state, and packing it up in gilt nails and velvet : and we finish our duty by placing over it a stone, written all over with lies. (原文 P.410)

長々と引用したが、Thackeray の真骨頂を示す文で、読む人がどこかでギクリとするであろう。しかも、英国では教会のすぐ近くに pub が必ずある。葬儀屋その他の商売やお義理で会葬した人達はそこで精進落としをする。上の文のあとにこのことがしっかり書かれているが、その pub を営んでいるのが、Pitt の情婦で親子共々 Pitt 家を追放された Horrocks だったというのは、Thackeray の芸の細かいところである。

近在の gentry 達の馬車だけが葬列に加わったのは、虚栄と言うより虚礼と言うべきだろう。馬車についている家紋が大事なのだ。

4. George Osborne (Amelia の義父、Georgie の祖父) の上流志向

Jos と Amelia の父、株屋の John Sedley 氏が、ナポレオン再起の報で持っている証券が紙屑同然になり、遂に破産の宣告を受けると、George Osborne は、細やかな商人だった頃から色々と世話になり、息子 George の Godfather であり、George と Amelia が子供の時から婚約の関係にあるにも関わらず、Sedley 氏を散々に悪口を言い、息子の婚約を破棄しようとする。息子 George が富裕な家と姻戚関係になり、上流の人々と厚誼を結んで紳士階級に入ることを切望して、破産者の娘 Amelia との約束が邪魔になったのである。父の息子に懸ける期待は幼児期に始まっていて、小売り商人だった時期に、すでに馬車を買っていた。

小学生の時に Dobbin の父が小売り商人であることを友達に嘲られ、その一人の George に、『オズバン、お前の親父だったただの商人では

ないか。』と言った。すると、小さなオズバンは傲然と『僕のお父さんは紳士だい、馬車を持ってらい』と答えて、Dobbinを悄然とさせたことがある。父 George の紳士階級志向は一生続き、馬車（多分バルーシュ）を始めて作らせた時に、貴族名鑑から縁もゆかりもない名門貴族のルー・オズバン家の紋章を借用して馬車につけたくらいだった。その息子が、Dobbin の忠告もあって、自分の命に反して Amelia と結婚式を挙げたと知ったときの落胆と怒りをほとんど一生忘れず、息子が Waterloo で戦死した後も、Amelia とその子（自分の孫）にも会おうとしなかった。時が経ち、少年期に入ろうとする孫に出会い、自分のもとに引き取って教育を始めたが、その目的は息子に果たせなかった夢を、孫によって達成することであった。『虚栄の市』の代表的市民と言えよう。彼の孫 Georgie にかける期待はつぎのようなことである。

「彼は、むかし、息子のジョージを、喜んで立派な私立学校に入れ、陸軍の将校に仕立てたことを自慢していたが、孫のジョージとその将来の目標については、もっと高い所に頭を置いていた。この小僧を紳士に仕立てるんだと言うのが、オズバン老の口癖だった。」
(岩波-5-117)

Amelia が夫の戦死のあと、父母の侘び住まいでひっそりと貧しい生活を送っていたが、母が亡くなり、父とともに Jos と同居することになって、nabob（インド帰りのお大尽）の豪華な家に入ると、今までとは打って変わり、(Georgie を Osborne に渡した見返りもあり) 裕福な生活に入った。

その様子が次のように描かれている。

「間もなくエミィも訪問帳を作って、定期的に馬車で駆け回って、ブラディヤ令夫人（ベンガル軍の陸軍少将ロジャ・ブラディヤ卿夫人）、ボンベイ軍の同じく陸軍少将 G・ハッフ卿夫人、重役のバイ

ス氏夫人などを訪問した……侍女も馬車も、訪問帳もボタンを一杯つけた少年も、ブラムトン時代の貧しい日常と同じように、アミーリャにとって親しいものになってきた。」(岩波-6-14~5) (原文 P.593~4)

そうなった後でも、老オズバンは Amelia には会わないが、娘が訪ねて行くのは黙認していた。

「ラッセル・スクエアのオズバン嬢は、リーズ市の紋入りの真っ赤な馭者台の覆いをつけた立派な遊山馬車に乗ってやって来た。」(岩波-6-9)

Miss Osborne from Russell Square came in her grand chariot with the flaming hammercloth emblazoned with the Leeds arms. (原文 P.591)

この文の Leeds は York に近い町であるが、Leeds の紋とは、Osborne がこの町の名門貴族 Osborne 家の紋を勝手に使っていることを皮肉っているのである。また、「赤い立派な遊山馬車」は現代の赤いスポーツ・カーに通じるものがある。妹はとくに例の銀行家オーガスタス氏と結婚しているが、彼女は縁遠いのでいつも父にそのことで嫌味を言われ、その憂さを馬車で晴らしているようだ。昔は馬車、今はマイ・カーなのである。

5. Joseph Sedley : 馬車道楽の nabob

Jos の道楽は、服装から化粧までのお洒落と美食(美酒も)と馬車である。その馬車も、独り者の癖に大きなバルーシュ型のしかも4頭立てを特に好む。馬4頭を一人の馭者が整然と走らせることは至難の業である。従って2人必要になる。大兵肥満の彼のことだから、この馬車にふんぞり返って乗れば、道行く人達から見ると、たいした壮観である。

現に、George 達と Vauxhall に着いて降り立った時、

「堂々たるジョスが、馬車をぎしぎしと軋ませながら降り立った時、群衆はこの太った紳士に向かって歓声を挙げた。」(岩波-1-102)

As the majestic Jos stepped out of the creaking vehicle the crowd gave a cheer for the fat gentleman. (原文 P.49)

George と Amelia の結婚式から新婚旅行、そしてロンドンへの帰着、Chatham での陸軍集結までの場面で、彼のバルーシュが頻々と現れる。一ヶ所だけ引用するが、新婚夫婦を送って Jos と Dobbin とが Brighton にいる時に、陸軍の動員令が下り、一旦ロンドンに引き揚げようとした場面である。(行動は別だが、Rawdon 夫妻も Brighton にいた。)

「……結局、明日 Jos の無蓋馬車に乗って、皆でロンドンに引き揚げようということになった。ジョスはどうかやらロードン・クロウリがブライトンを引き上げるまでいたかったらしいが、ドビンとジョージに頑張られて、皆をロンドンに連れて帰ることを承知して、彼の堂々たる人品に相応しく 4 頭の馬を言い付けた。」(岩波-1-201)

……(George, Jos and Dobbin) agreed that a general move should be made for London in Jos's open carriage the next day. Jos, I think, would have preferred staying until Rawdon Crawley quitted Brighton, but Dobbin and George overruled him, and he agreed to carry the party to town, and ordered four horses, as became his dignity. (原文 P.237)

このあと、Brighton から London のあるホテルに到着する場面で、この馬車がバルーシュであることを明らかにする。Thackeray は、当初曖昧な表現をして、間を置いてからそれが何であることを明らかにする書き方、読者に少し考える間を与える手法に^た長けている。度々使われると食傷気味になるが。

この他にも、Jos の馬車道楽があちこちで触れられているが、圧巻は、

「ちょうど馬車製造の本場である近くのロング・エイカ街に注文したスマートな遊山馬車が出来上がるところを、ドビン少佐と監督がてら見に行くのが、ジョスにとってとても嬉しい仕事だった。それから立派な馬を2頭雇って、それをつけて堂々と公園を乗り回したり、インド時代の知り合いを訪ねたりした。」(岩波-5-181) (特に名を挙げずに公園と言う場合、ロンドンならばまず Hyde Park を想起する。有名な馬術練習用のコース Rotten Row や Ladies' Mile がある。80ページ挿絵参照。)

この時作った Jos の遊山馬車が異彩を放つのは、(前に Bareacres の馬車が話題となった) 夏の大陸旅行の船中でである。

「最後に、大変さっぱりした、上等の旅行馬車があったが、それが紳士達の話題になった。……(その馬車の旅行従僕 Kirsch が) あの馬車は、カルカッタやジャマイカでしこたま蓄^ためてきた Nabob の物で、私がその旦那のお伴をして行くんだとのことであった。」(岩波-6-45)

Finally, there was a very neat, handsome travelling carriage, about which the gentlemen speculated. ……He (Kirsch) informed them that the carriage belonged to a Nabob from Calcutta and Jamaica, enormously rich, and with whom he was engaged to travel ; ……(原

文 P.608)

彼が大陸旅行を始めから頭に置いてこの馬車を作らせたことが、この後の各地の貴族や有名人達を歴訪したことで分かる。虚栄の道具だったのだ。しかし、誰にも迷惑を掛けず、自分の財力で作った馬車だから、とやかく言うべきでもないだろう。借金だらけの貴族の旅行馬車と違って。

5. 騙しの道具

既に述べたように、Miss Crawley の遺産が5,000ポンドに終わった後の Bute 夫人の虚勢振りのように、自家用馬車が人を騙す道具に使われる例も数多い。それについて、Thackeray は、ナポレオン戦争後に、大陸を自家用馬車で旅行する連中を、次のように記す。

「今日でこそ、フランスやイタリーのどんな町に行っても、英国の貴族達が何処でもそれで押し通す、例のたいした威張り方と傲慢さで、宿屋の主人を騙したり、信じ易い銀行家から虚偽の小切手で金を引き出したり、馬車製造人に馬車を作らせて乗り逃げしたり、金細工師に装身具を作らせて金を払わなかったり、気の良い旅行者からカルタで金を巻き上げたり……しているのを見ない所はほとんど無いくらいであるが、30年前には、ただもう自家用馬車で旅行する英国貴族だとさえ言えば、何処でも信用貸しをしてくれたもので……」(岩波-3-155)

And whereas, there is now hardly a town of France and Italy in which you shall not see some noble countryman of our town, with that happy swagger and insolence of demeanour which we carry everywhere, swindling inn-landlords, passing fictitious cheques upon credulous bankers, robbing coach-makers of their carriages, goldsmiths of their trinkets, easy travellers of their money at cards,

……thirty years ago you needed but to be a Milor Anglais, travelling in a private carriage, and credit was at your hand wherever you chose to seek it, ……(原文 P.357)

そして、Rawdon 夫婦がその先駆者達だと述べている。彼等がパリのホテルを旅立ったあと数週間して、彼等が買い物をした店の者が何度も請求書を持って訪れるので、始めて宿賃が踏み倒されたと知ったのである。(原文 P.357)

6. 馬車の種類と使用者の心理

Becky が Miss Crawley の看護をしていた Park Lane の家から、Rawdon と駆け落ちをした事が分かったその日の朝、騒ぎの最中に Mrs. Bute がその家に到着する。

「ブリッグズさんが、この感動的な興味ある手紙（注：Becky が駆け落ちを告白する手紙）をちょうど読み終わった時、ファーキンが部屋に入って来た。『Bute Crawley 夫人がハンプシャからの郵便馬車で、たった今お着きになりましたよ。そしてお茶が欲しいとおっしゃるんですが、貴女降りて来て朝御飯を出して下さいますか？』」（岩波-2-34）

Just as Briggs had finished reading this affecting and interesting document. ……Mrs. Firkin entered the room. “Here’s Mrs. Bute Crawley just arrived by the mail from Hampshire, and wants some tea, will you come down and make breakfast, Miss?” (原文 P.149)

下線の the mail を訳者は〈乗り合い馬車〉と訳しているが、ここはどうしても言葉通り〈郵便馬車〉と訳すべきところであろう。郵便馬車は、1785年 John Palmer が郵便馬車で郵便物を送達する組織を作った始まったのだが、乗り合い馬車のうちでも、勢いの良い馬と馭者と

で高速力で走る、急行馬車と言える。激しい揺れに長時間乗る乗客には、それに耐える体力と気力が必要である。それを押して乗った Mrs. Bute の心理、Becky の素性を調べ上げた夫人が、一刻も早く Miss Crawley のもとに行き、Becky を追い払って老嬢を独占しようとして、はやり切っていたことを示している。

しかも、誰も朝御飯を食べていない朝早くに到着したことは、夜半の郵便馬車に乗ったことを示している。徳川時代で言えば「早朝に早駕籠で乗り着けた」というところか。「真夜中の旅でかじかんだ Bute Crawley 夫人」とこのあとに書いてある。〈乗り合い馬車〉では切迫感が伝わらない。

Dobbin 少佐の場合にも似たような記述がある。Dobbin がインドから帰国の途中 Jos と同じ船に乗り合わせ、Southampton に上陸して、Royal George Hotel に入ったが、一刻もロンドンに帰り着きたい Dobbin が Jos をいくら急き立てても、Jos が窮屈な船旅の後でゆっくり贅沢な食事と一泊を望んで動かないので、やむをえず翌朝 Jos を残して馬車でロンドン向かう。ここでは曖昧に馬車と書いているが、到着したロンドンの常宿の主人が、『どうしてまた chay でなんか？ coach でたくさんでしょうに。』と言う。これで、少佐が仕立てた馬車が、chaise (shay あるいは chay) であったことが分かる。図のように、折り畳みの幌が付いた2輪で1頭引きの軽快な馬車である。

図6



a chaise

彼が急いで来た理由を「なにぶん Camberwell に住む両親に会いたい一心だったものだから。」と書いてあるが、それは Thackeray 一流の冗談で、実は、Amelia とその子 Georgie に一刻も早く会いたい一心だったからだ。ここでも選んだ馬車の車種で彼の心理を描いているのである。

7. 職業上必要な医師の馬車

このことについては、本稿45ページで村岡健次が触れているが、この小説でも言及されている。

「ペスラ先生（今では婦人の間で一番流行っている医者で、豪華な暗緑色の馬車を置いて、間もなく勲爵士ナイトにもなろうという勢いで、Manchester Square に邸宅を構えている……）」（岩波-3-196）

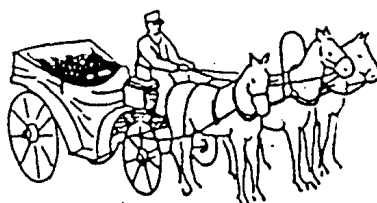
……Dr. Pestler (now a most flourishing lady's physician, with a sumptuous dark-green carriage, a prospect of speedy knighthood, and a house in Manchester Square……) (原文 P.379)

8. Dobbin の troika

小説の終り近くで、大陸旅行中の Jos と Amelia が、Steyne 卿の件で英国を追われるように大陸に渡って放浪していた Becky に出会い、どこまでもお人好しの二人が、彼女と一緒に暮らそうとするが、Dobbin が強硬に反対する（結局は Dobbin の予想したように、Jos は Becky に骨までしゃぶられるのであるが）ので、諍いさかいになって、Dobbin が一人本国に帰る場面で、彼が引っ張り出してきた馬車は、Georgie が [trap]（バネ付き1頭立て軽馬車）と呼んでいるが、3頭の白馬 (G. Schimmel) をつけて走り出したところをみると、troika（ロシアの3頭引き馬車）らしく、「そのトラップというのは、少佐が金6ポンドを奮発して購入して、皆にずいぶんひやかされていた物だった。」（岩波-6-147）

The “trap” in question was a carriage which the Major had bought for six pounds sterling, and about which they used to rally him a good deal. (原文 P.660)

図 7



the troika

よくよく時代おくれの古物なのであろう。Jos がこの大陸旅行に持ってきたのは、前に述べたように、人目をひく豪華な遊山馬車であるから、二人の人物の性格は際立って対照的である。因みに Dobbin の父は、昔は小売り商人だったが、今は Sir William Dobbin のタイトルで呼ばれる豪商で、市の参事会員をしている程だから、この購入価格は、金銭の問題ではなく、人格の問題である。Dobbin は、[虚栄の市] に足を踏み入れない唯一の登場人物である。Thackeray は、文中で Dobbin を次のように言っている。

「どうも紳士というものは、一部の人が考えているよりも少ないものらしい。……即ち志高く、その誠実が常に変わることなく、しかもそれが質において不易であるばかりでなく、程度においても極めて高く、下劣な根性が無いのでいかにも清純であり、上下の区別なく平等の同情をもって、何の疾しい所もなく世間に顔を向けられる人。……本当の紳士ということになると、果たして幾人いるだろう。ひとつ小さな紙切れを取って、もし自分の知人にこれと思う人がいれば、銘々その名を書いてみようではないか。

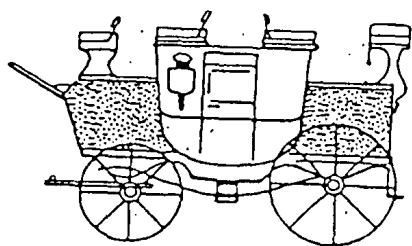
読者よ、私は少しも狐疑することなく、私の紙片にわが少佐の名を書くだろう。」(岩波-6-51~52) (原文省略)

この場合の紳士は、社会階層上の基準とは違った人格の次元によって認められるものだろう。現代英国での紳士の定義は、これら二つの次元の間を行ったり来りしている。本来の gentleman は階級を示す語で、Sir を前につけて呼ぶ以前には、名前の後ろに置いた語であったが。

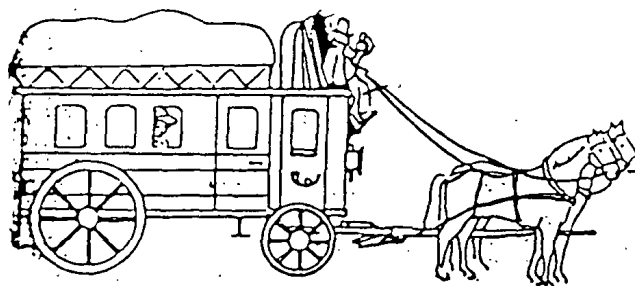
8. Thackeray と乗り合い馬車

ここまでは自家用馬車が主題だったが、貸し馬車（辻馬車）と乗り合い馬車も無視できない英国交通文化の華なのである。しかし、辻馬車に関する episode はこの小説にはあまり現れない。むしろ乗り合い馬車に対する作家の郷愁が語られている箇所注目したい。

図8 乗り合い馬車2種



the mailcoach (a stage coach)



始めて Becky が Sir Pitt と共に Queen's Crawley に行く時に、乗り合い馬車に乗ったことが語られているが、そこで作者自身の乗り合いに対する郷愁が、(この作家がよくするように) 芝居の説明の間にポロッと洩らされる。

「むかし、同じような上天気の日、同じ道筋を、思い出多い駅馬車で通ったことのある作者は、その旅を回想するにつけて、何と

も言えない懐旧の情を感じずにいられない。いろんな面白いことのあるあの街道はどうなってしまったのだろう。あの年取った、人のいい、鼻にニキビなんか出していた馬車屋さんには、もうチェルシーもグリーンニッジも用が無くなったのか。あのいい人達は、今は何処にいるのだろう。」(岩波-1-133)

But the writer of these pages, who has pursued in former days, and in the same bright weather, the same remarkable journey, cannot but think of it with a sweet and tender regret. Where is the road now, and its merry incidents of life? Is there no Chelsea or Greenwich for the old honest pimple-nosed coachmen? I wonder where are they, those good fellows? (原文 P.65)

注：西暦紀元の始めにこの島を占領したローマ軍が建設した Roman road については、前に述べたが、駅馬車の交通が盛んになって、それに対応する道路の改良と整備が18世紀の中頃から有料道路トラストによって行われ、1785年になると、駅馬車の所要時間が1750年代に比べて半減した。前に述べた郵便馬車の連絡網の導入も、この年のことである。ロンドン・ブライトン間の所要時間は、1750年には14時間だったが、ナポレオン戦争の末期には7時間になっていた。従って駅馬車の利用度が益々高まったことは疑えない。Hampshire でも同様であろう。

しかし、この駅馬車で Becky と Sir Pitt が Queen's Crawley に向かって行った時に、同乗したある婦人の snob 振りをのべている。

「いやに取り澄ました婦人、この婦人は今まで駅馬車なんかで旅行したことは無いんだがと、わざわざ断った（駅馬車に乗ると、きつとこんな婦人の一人くらいはいるものだ。）」(岩波-1-133)

……the prim lady, who declared upon her sacred honour she had never travel led in a public carriage before, (there is always such a

lady in a coach, ……) (原文 P.64～5)

次に記^しるのは、George と Amelia の新婚旅行で Brighton に滞在中のことである。これから何をしようか相談の末に、Rawdon、George、Jos の三人が、Southampton-Brighton 間の駅馬車 the Lightning (稲妻号) が到着するのを見に行こうということになる。全く plot と関係の無い episode であり、作者の好みの問題だなど思う。簡潔だが視覚性が高い文である。

「時間きっかりに、外にも中にも客を一杯乗せて、車掌は例の節を付けて号笛を吹きながら、[稲妻号] が町をまっしぐらに走って来て、乗り合いの事務所の前に止った。」(岩波-2-147)

Punctual to the minute, the coach crowded inside and out, the guard blowing his accustomed tune on the horn—the Lightning came tearing down the street, and pulled up at the coach-office. (原文 P.227)

作家はこの情景を何度も見たようだ、恐らくお気に入りの情景だったのであろう。そして、この小説の各所で作家は Brighton の町に対する思い入れを仄めかしている。また、[稲妻号] はこの他数ヶ所に出てくる。なお、文中の pull up は、現在でも [車を止める] 意味に使うが、馬車時代からの言葉で、手綱を引き上げて馬の首を引いて止めたことから出たのだらう。

次は、作家が執筆中に、その日の朝仕事に向かう途中に見た光景である。

「ちょうど今朝がた、リッチモンドからオムニバスに乗って来る途中のことだが、馬を換える間、私はオムニバスの屋根の上から、下の水溜まりの中で3人の小さな子供達が、どろどろになって、仲よく楽しそうに遊んでいるのを見ていた。」(岩波-2-160)

It was but this present morning, as he rode on the Omnibus from Richmond ; while it changed horses, this present chronicler, being on the roof, marked three little children playing in a puddle below, very dirty and friendly and happy. (原文 P.214)

注1 : 下線部は、[私] と訳される。this present chronicler と客観化して、he にしたのだろう。

注2 : この小説で描かれている時代には、omnibus という言葉は、まだ英語化していない。O.E.D. でこの語が初めて使われるのは1829年だと明示されていて、文例も「フランスの omnibus を英国でも作ろうか」という話なので、この型の馬車が英国で出現したのは、それ以後で (1832) 略して bus となったのもほとんど同時だと思われる。omnibus の大多数は図のように、後ろから乗り、直ぐに階段があって、2階 (roof) の座席に登るようになっている。この方式が現在の英国名物の2階建てバス (double-decker) に踏襲されている。訳者は単に [乗り合い馬車] と訳しているが、他に乗り合い馬車が2種類あるので、omnibus のイメージが浮かばない嫌いがある。

図9



Thackeray はどうも「乗り合い派」のようである。彼が遺産を蕩尽して、作家として名を成すまでの約10年間は、自家用馬車どころではなかつただろう。

馬車の話をこの辺で一応終えて、次の章で馬術の話に移りたい。余談に亘るが、海軍兵学校では、太平洋戦争が始まる以前には、馬

術訓練があった。勿論海軍でも陸戦は重要な訓練であるが、そのための馬術訓練ではないようで、将来海外公館で武官勤務をしたり、国際的な催しなどで外国特にヨーロッパの士官達と交際する場合、馬術が中・上流の紳士に必要な教養であり、その心得が無ければ紳士として扱われない恐れが在る、という理由によるものだと説明されていたようである。

この小説では、何度も馬術の話題が出てくるが、本稿の標題に馬術を加えなかったのは、飽くまでも馬車を主題にしたかったので、馬車と馬術とではウマが合い過ぎて主題がボケるような気がしたからである。

次ページの Rotten Row は今でも残っている。Rotten には「腐った」という意味があるが、この Rotten Row はフランス語の Route de Roi が転化したものと説明されている。「王者の通り道」の意である。

第4章 馬術

1. Becky Sharp と馬術

Becky は、貧しい画家と舞台歌手の子で、父が死去した後、Pincarton 女史の塾に預けられて育ったのだから、紳士淑女の教養である馬術に縁が無かった筈である。しかし、英国軍が Brussels で待機している時の次の状況が描かれている。

「ブラッセルズで一番偉い人達もいくらか混じっている小人数の乗馬者の列の真ん中に、大変可愛いぴったりと身に合った乗馬服を着て、美しい小さなアラビヤ馬に乗ったレベッカがいた。彼女は Queen's Crawley で馬を習っていたので（そこでは従男爵と若主人の Pitt 氏と、Rawdon 自身までが、度々彼女に馬の稽古をしてやった）乗り方は実に堂に入ったもので、ご婦人に親切な Tufto 将軍と並んで来るのだった。」（岩波-2-262）

図10



Hyde Park の南縁を走る Rotten Row で朝飯前の乗馬を楽しむ紳士・淑女達 (G. ドレ画)
『ドレ画 ヴィクトリア朝時代のロンドン』(小池滋編著、社会思想社)より転載

この辺りの描写でも、作家は矛盾や撞着^{どうちやく}を許さない気配りをしてい
る。

そして、この地で Becky は、George と度々遠乗りに出掛けて親密
になり、新婚の妻 Amelia に隠れて George が Becky に駆け落ちを約束
する手紙を渡すのである。

2. Georgie の馬術修行

少年期に入った Georgie を、Amelia のもとから Old Osborne が引き取って、紳士にするべく教育を受けさせるが、その大事な一つが馬術である。

「馭者は、大旦那の命によって、これ以上の小馬は幾ら金を出しても買えないという程のを買って来た。Georgie はまず乗馬学校でそれに乗ることを教わり、大丈夫あぶみ鑑なしでも乗れ、横木も飛び越えるようになってから、New Road を通って Regent's Park へ連れて行かれ、それから Hyde Park へも出て、馭者の Martin を後に従え、そこを堂々と乗り回すようになった。」(岩波-5-119)

The coachman was instructed to purchase for him the handsomest pony which could be bought for money ; and on this George was taught to ride, first at a riding-school, whence, after he had performed satisfactory without stirrups, and over the leaping-bar, he was conducted through the New Road to Regent's Park, and then to Hyde Park, where he rode in state with Martin the coachman. (原文 P.550)

3. Jos Sedley の馬術

軍に同行する Amelia を乗せて Jos は Brussels に渡って、そこで陸軍将校と付き合ううちにすっかりその気分になり、軍服に似た服装をして、堂々と馬車を乗り回していたが、いよいよ Waterloo の戦いが始まり、英国軍敗北の誤報が伝わると、妹を O'Dowd 夫人に預けた儘、逃げ帰ろうと馬を探したが折悪しく手に入らないので、Rawdon が Becky に置いて行った 2 頭の馬を買おうとする。Becky はその足元を見透かして法外な値段を付ける。Rawdon 夫婦が 1 年暮らせる程の金額である。何とか払って買うが、馬車を付けたことのない馬なので、乗馬で逃げることにする。

「Jos はもともと馬術が下手で、少々びくびくものだったので、鞍の上の姿はあまり良いものではなかった。『まあ、あの人を御覧なさい、アミーリア、よその家の窓に飛び込んで行きますよ。あんな近所迷惑な馬乗りさんは私始めてよ。』オダウド夫人は彼等の姿が見えなくなるまで嘲弄の言葉を浴びせていた。」(岩波-3-71~2)

Jos, a clumsy and timid horseman, did not look to advantage in the saddle. "Look at him, Amelia, dear, driving into the parlour window. Such a bull in a china-shop I never saw."……Mrs. O'Dowd pursuing them with a fire of sarcasm so long as they were in sight. (原文 P.313)

アイルランドの名門貴族の娘で当然乗馬の心得がある夫人にとっては、目も当てられない光景だったろう。結局英国軍は大勝利を収めたのだから、Jos は大金を巻き上げられた上に、大恥を晒した訳だ。言葉通り馬脚を現わしたのである。この情景も作家の挿絵で面白く描かれている。

4. HUNTING

上流階級に馬術の心得があるならば、それによって色々なスポーツを楽しもうということになる。その最たるものが、*hunting* である。近隣の同じ階級の仲間が寄り集まり、猟犬 (*hounds*) を使って潜んでいる野生動物 (狐、兎など) を追い出し、それを吠えながら追う犬達の後を、乗馬で追う、野趣豊かな遊びで、その後は大抵の場合 *party* で終わる。スポーツであり、同時に社交である。この小説にも、この情景が述べられている。

「しかし何といっても一番素晴らしかったのは、Sir Huddleston の猟犬群が Queen's Crawley の芝生に勢揃いした日だった。……」

この情景は、Little Rawdon の経験として語られているので、*hunting* 中のことには触れられていないが、それでもかなり長文なので引用を省略する。(日本語訳は第4分冊118～119ページ、原文は444～5ページ)

もう一例は、やや間接的だが、それだけに面白い。Waterloo 戦の時からずっと Dobbin の信頼すべき上官だった O'Dowd が少将に累進して、退役した後のこと、

「オダウド少将閣下は至極壮健だった。そして一群のビーグル犬を飼って、オダウズタウンでなかなか豪華な生活をして、その県で一番偉い人だった。」

But the Major-General is quite well, and lives in great splendour at O'Dowdstown, with a pack of beagles, and he is the first man of his county.

ビーグル犬は猟犬であるから、一群を飼っていることは、すなわち *hunting* を楽しみながら老後を送っていることを意味する。これも Thackeray 独特の婉曲表現である。なお、*hunting* に使われる猟犬は2種類、視力に優れたのと鼻がよく利くので使われるのとあり、*beagle* は後者である。

最近、このスポーツは動物愛護の精神に反するという批判が高まり、行われなくなったようである。

5. FOUR-IN-HAND-DRIVING

この時代の馬術好きで冒険好きの若い貴族達の間で *four-in-hand driving* というスポーツが流行した。4頭の馬を一人で御して馬車を走らせる危険な遊びで、その同好会もあった。馬は余程訓練しないと、物音に驚いて暴走したりして、結構事故を起こすので、市民のひんしゅくを買う遊びだったし、良識のある貴族はしなかった。この小

説にも登場するが、これを楽しむ人を暗に「やんちゃな道楽者」というニュアンスで扱っている。

結 び

本稿では、この小説を Becky の lady になろうとする遍歴を時を追って辿ることをしなかったので、本稿を通じてこの小説の全体像を掴むことは難しい。なにしろ Oxford 版でも700ページ近い長編であり、A5判50ページに収め切れるものではない。そして digest では、作家の持ち味が見えない。岩波文庫が手に入る日本語訳の唯一の版であろう。いずれこの版も売り切れになって、旧漢字、旧仮名遣い、旧表記法の故をもって絶版となる恐れが無いわけでもない。岩波本社の在庫も少ないようだ。

Vanity Fair を読むと、19世紀英国の社会像が集大成されていて、英国近代・現代の歴史を馬車を通じて多少学べたなど、いささか充実感を味わった。長らくこの世に住んでも、学び切れないものが沢山ある。

この小説を読みながら、Jonathan Swift の *Gulliver's Travels* のことが頭に浮かんで、第4話 Houyhnhnm の国（賢馬の国）の人間と馬の逆転の発想の動機が分かった気がした。英国人の最も近くにおいて、人間との間に、使役する側とされる側とはっきりした関係にあるのは馬なのであり、その立場が逆転するという発想は英国人には thrilling だったと思う。しかも、馬は、使役されるなどというのは綺麗事で、酷使されていると言うのが妥当な場合が多かったろうと思う。戦後間もなく牧場で働いていたことがあったが、荷馬車に付けて働かそうとして近付くとハミを見ただけで歯をむき出して怒る老馬がいた。19才だったから、「定年はとっくに過ぎたぞ。」と言っていたのだろう。

この賢い馬が人間の姿の家畜 Yahoo を評して、「Yahoo という奴はどうにもならない動物だ。我々は食べても（飲んで）腹が満ちればそれ以上欲しがらないのに、Yahoo は、腹が一杯でも、旨そうな物が出

るとまた食べたがる、愚かな動物だ。」宴会で深酒をした夜などに私はこの言葉を思い出す。そして困ったことにすぐ忘れる。やはりYahooなのだ。

Thackeray が馬車や馬のことを、嫌になるほど頻繁に書いたのは、意図的だと思う。馬や馬車の英国文化に与えた影響がそれ程大きいのだ。馬車の選択や使い方が登場人物の心理や人格まで表現できるとなれば、単なる交通手段で終わらないのである。

馬車が現代の生活に残した痕跡を、私は意外なところで発見した。Brontë 姉妹ゆかりの町 Haworth のある坂道の写真を、英国旅行の土産として教え子から貰ったことがある。その坂道に敷かれているのは、坦々としたセメントやアスファルトではなく、玉石のごろごろ混じった道だった。重たい馬車を引いた馬の蹄が掛かるように、わざと滑らかな表面に凸凹を与えていた痕跡を、その道路が残していたのである。

Thackeray がこの小説で描いた英国人や英国社会は、あくまでも特定の階級の一側面である。現在でも英国には Upper-class と non-U class の二つの国家があると言われている。しかし、現在政治面では Upper-class が国政の決定権を持っているとは言えない。衆議院 (House of Commons) が主導権を持っているから。「女王陛下の共和国」と呼ばれる^{ゆえん}所以である。

近・現代英国のもう一つの側面を鋭く描くのが、Charles Dickens の小説である。その側に、貧しく弱い者達を無くしたいと願う人達がいる。Thomas Carlyle, Elizabeth C. Gaskell, Edward Carpenter, F. D. Maurice, John Ruskin, William Morris, George B. Shaw など立場こそ変われ、貧富の差がない理想社会を希求した人達で、19世紀後半に細い流れが次第に太くなり、支流を集めて、20世紀に労働党という一大勢力になった。その特色は、マルキシズムの影響をほとんど受けなくて成長してきた社会主義と言える事である。(そう言えば、Thackeray を酷評したある批評家の肩を Dickens が持ったことから、この二人の作家が不仲になり、Thackeray が死去する前の年に、やっと和解が成

立した。有り得ることである。)

そういう訳で、色々な人達の目に、色々な英国が見えた、その一つの例としてこの小説を取り上げたのである。

この小説が人気を得た理由の一つに、彼独特のユーモアがある。筋もさることながら、ユーモラスな語り口を楽しみ、ゆったりした気持ちで読むべき小説である。

平成13年4月